

「トルコ共和国における行政発掘」

南・西アジア課程 トルコ語専攻

学籍番号 8599114

只野 千鶴

目次

はじめに

1 章 アナトリアにおける発掘調査とアナトリア考古学史

- ・ 共和国成立以前
- ・ 共和国成立以後

2 章 ケバン・ダム建設の背景と行政発掘調査

- ・ ケバン・ダム建設の背景
- ・ ケバン・プロジェクト
- ・ 調査結果

3 章 アナトリア考古学におけるケバン・プロジェクトの意義と問題点

- ・ 意義
- ・ 問題点

おわりに

はじめに

現在のトルコ共和国が位置するアナトリアにおける考古学研究を「アナトリア考古学」という。そのなかでも本稿では 1960 年代末から 70 年代半ばにかけて初めて行われた行政発掘調査であるケバン・プロジェクトを取り上げ、政府による開発計画とのかかわりからその意義と問題点について考察することを目的とする。アナトリアにおいては、その地理的特殊性から過去から現在に至るまで様々な国や民族が存在し、ほとんど空白期をはさまずに文化層が連続して現れている。そのため考古学的関心が集中し、これまでトルコや西欧諸国、日本など多くの国の研究者によって数多くの遺跡が発掘調査されてきた。アナトリアにおける遺跡の多くが遺丘と呼ばれる丘状の形態で現れ、その発掘研究がアナトリア考古学の基幹となっている。今回取り上げる行政発掘調査の対象となっている地域は「肥沃な三角地帯」と呼ばれるチグリス(トルコ名:ディジュレ川、Dicle Nehri)・ユーフラテス川(トルコ名:フラット川、Fırat Nehri)の上流域にあり、数多くの遺丘が存在し、その考古学的重要性は高い。そのような背景を受けて立ち上がったケバン・プロジェクトに関しては、その調査結果の報告が出版されている他、大村氏によるその問題点を指摘する研究があるものの¹、行政発掘そのものの議論として高まりを見せるまでには至っていない。

本稿ではまず、アナトリア考古学の研究史を共和国成立以前と以後に分けて概観し、行政発掘に至るまでの中心となった研究者と研究動向の変化を述べる。

次にトルコ初の行政発掘であるケバン・プロジェクトについて、それにいたるトルコ国内の経済的背景を明らかにし、調査報告書を参考にして具体的な調査内容、その成果について明らかにする。

最後にアナトリア考古学におけるケバン・プロジェクトの意義と問題点を提示し、行政発掘調査のあり方について考察する。

今日では、発掘などで得られる考古資料の分析・調査のみならず、考古学それ自体に問題を見出す客観的な研究が活発になっている。たとえばアナトリア考古学においては、ナショナリズムとの関連性から考古学を見直すという研究が I・ホッダー (I. Hodder) や M・オズドアン (M. Özdoğan) らによって報告されている²。このような研

¹ 大村幸弘「アナトリア考古学における行政発掘」『オリエント』25-2、1982、p. 118-128

² Ian Hodder, "The Past As Passion And Play: Çatalhöyük as a site of conflict in the construction of multiple pasts", Mehmet Özdoğan, "Ideology And Archaeology in Turkey", Lynn Meskel(ed.), *Archaeology Under Fire: Nationalism, politics and heritage in the Eastern Mediterranean and Middle East*, 1998, London

究動向がみられるなか、発掘調査の研究結果のみではなく開発計画と文化財保護という問題に対する考古学の関わりを研究することは十分に意義深いものとする。

本論に入る前にまず、行政発掘とは何かを明らかにする必要がある。日本では、建築工事の前に発掘調査をして、その土地における考古学的様相を記録することが法律によって義務付けられている。このような開発下におかれている遺跡および遺物の調査、つまり救済を目的とした発掘調査を指して「行政発掘」と呼んでいる。一方トルコでは上記のような開発に瀕した考古学資料の救済および保護を *tarih eserleri kurtarma ve koruma* (歴史遺物救済および保護) といい、それに当たって行われる発掘調査を *kurtarma kazısı* (救済発掘) という。これらの概念はケバン・プロジェクトの発足により初めてトルコに生まれたものである。

1 章 アナトリアにおける発掘調査の概要とアナトリア考古学史

前述したように、現在まで国内外を問わず多くの研究者が参加し、発掘調査が行われているアナトリアにあって、まずどのように考古学的発掘調査が開始され、研究が進められてきたのかを明らかにする必要がある。本章ではそのアナトリア考古学史の概略を共和国成立以前と以後に分け、その担い手が主に西欧の研究者であった共和国成立以前からトルコ人考古学者が生まれ、行政発掘が開始されるに至る 1960 年代後半までを概観する。

・共和国成立以前

アナトリアにおいて、本格的な発掘調査が行われ始めたのは 19 世紀の中ごろである。この時期は主にエーゲ海沿岸地域がヨーロッパの研究者や蒐集家らの考古学的関心の的になっており、この地域の遺跡が比較的多く地表に露出して現れていたため旅行家の関心を引いたこと、19,20 世紀初頭の西欧の考古学者がエジプト、メソポタミアに強い関心を抱いていたことなどがその引き金になったものと考えられる。まず 1869 年にはイギリスの J・T・ウッド (J. T. Wood) がエフェス (Efes) の発掘調査を開始し、1870 年にはドイツの H・シュリーマン (H. Schliemann) がトロイ (Troy) を、1878 年には同じくドイツの C・フマン (C. Humann) がベルガマ (Bergama) の発掘調査に着手した。これらのほか、19 世紀末にはネアンデルア (Neanderia)、アソス (Asos)、ミレトス (Miletos) の発掘が始まり、20 世紀にはいるとアメリカの H・C・バトラー (H. C. Batler) によ

ってサルディス（Sardis）の発掘調査が開始された。トロイを除いた遺跡のほとんどがヘレニズム、ローマ、ビザンツなどの文化層を中心に調査されており、多くは今日まで継続した調査が続けられている。以上のことより当時の調査の主眼は古代アナトリアとギリシア世界との結びつきにあり、アナトリア考古学黎明期における担い手は主にドイツ隊を中心としたヨーロッパの考古学者たちであったといえる³。

20 世紀にはいると、ドイツの言語学者 H. ヴィンクラー（H. Winkler）によりヒッタイト帝国の首都ボアズキョイ（Boğazköy：古代名ハットゥシャ）の発掘調査が開始された（1906 年）。一万枚を超える粘土板とともに歴史に埋もれていたヒッタイト帝国が「再発見」されたことはセンセーショナルな出来事であり、現在までヒッタイト研究が中央アナトリアの考古学研究の主翼を担っているという点で、この発掘調査の持つ意味は大きい。ボアズキョイではその後二度の世界大戦などで調査が中断された時期をはさみながらも、今日までドイツ隊が継続的な発掘調査を行っている。そのなかでもヴィンクラーの後を受けて 1931 年より調査を行った K・ビッテル（K. Bittel）の組織的、科学的な調査方法はその後の発掘調査にも多大な影響を与え、ここにアナトリア考古学の基礎ができあがったといえる⁴。また、この発掘調査によりアナトリアにおける考古学的関心は中央アナトリアに向けられるようになった。これに伴い調査地域もしだいにエーゲ海沿岸から中央、南東アナトリアへと拡大し、アナトリアはオリエント世界とのつながりからも捉えられるようになった。

以上述べてきたとおり、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのアナトリア考古学黎明期ではヨーロッパの研究者がエーゲ海沿岸地域の遺跡を中心として発掘調査を開始し、ヘレニズム、ローマ、ビザンツ時代を調査対象としてきた。つまりアナトリア考古学研究の主眼は古代アナトリアとギリシア世界との関連性に置かれていたといえる。しかしボアズキョイの発見などにより調査対象地域は中央、南東アナトリアへと拡大し、オリエント世界とのつながりからも考えられるようになった。

．共和国成立以後

トルコ共和国が成立し、1931 年にトルコ歴史協会（Türk Tarih Kurumu）が設立されたことにより、アナトリア考古学は大きな変化

³ 大村幸弘、護雅夫「アナトリアにおける発掘調査の遠隔概要」『東方学』78 -

⁴ 大村幸弘「アナトリア考古学の現状」『オリエント』21-2、1978、p 72

を迎えた。トルコ歴史協会はその設立の目的の一つとして、トルコ人考古学者によって発掘調査を行うことをあげており⁵、以降トルコ人考古学者による本格的な発掘調査が行われるようになったのである。1935年にはH. Z. コシャイ (H. Z. Koşay) らによってアラジャホユック (Alacahöyük) の発掘調査が行われ、初めてトルコ人の手による本格的で組織的な調査が行われた。1930年代には中央アナトリア中心だった調査地域も、1940年代以降はH・Th・ボッセルト (H. Th. Bossert) によるカラテペ (Karatepe) の発掘 (1945-69)、T・オズギュッチ (T. Özgüç)、N・オズギュッチ (N. Özgüç) らによるキュルテペ (Kultepe) の発掘など (1948-)、アナトリア全土へと広まりを見せ、トルコ人考古学者はアナトリア考古学において大きな役割を担うようになった。また、外国調査隊による発掘調査も活発に行われ、前述したようにピッテルによってボアズキョイの発掘が再開され、1949年にはR・S・ヤング (R. S. Young, アメリカ) によってゴルディオ (Gordion) の本格的な発掘が開始された。ほかにもイギリスのJ・メラート (J. Mellert) が1957年からハジュラル (Hacılar) で、1961年から1965年にかけてチャタルフユック (Çatalhöyük) でそれぞれ新石器時代の文化層を対象に発掘調査を行った。これらの遺跡は人類の農耕起源を解明する上で重要な遺跡であり、世界的な注目を浴びている。また、同じく1961年から1965年にD・フレンチ (D. French, イギリス) がジャン・ハサン (Can Hasan) で、金石併用時代の文化層を対象に発掘調査を開始した。

60年代後半になると、それまで学術発掘中心であったトルコ共和国において初めてダム建設に伴う行政発掘が行われるようになる。この背景は、政府によって電力資源開発などを目的としてチグリス・ユーフラテス川に大規模なダム建設の計画が持ち上がったことにある。しかし、計画の中心となっている東アナトリア地域では川沿いに多くの遺丘が未調査のままで存在しており、水没地域の歴史的、文化的遺物を救済し、東アナトリアの文化編年を解明するという目的で緊急に調査が行われることとなった。1968年にはトルコ最大規模であるケバン・ダムの水没地域の遺跡調査、歴史遺物救済を目的としたプロジェクトが設立され、行政発掘調査が開始された。つづいて1975年からはアシャウ・フラット・プロジェクト (Aşağı Fırat Projesi) でも集中的な行政発掘調査が行われた。これらの大規模なプロジェクトの開始によって、それまで考古学的空白地帯であった東アナトリア地域が開拓され、この時期の考古学的関心を一挙に引くこととなった。

⁵ Uluğ İğdemir, *Cumhuriyetin 50. yılında Türk Tarih Kurumu*, Ankara, 1973

2 章 ケバン・ダム建設と行政発掘

本章では、ケバン・ダムの建設とそれに伴う行政発掘に至る過程をトルコの工業化と水資源開発という経済的な観点から考察し、ケバン・プロジェクトの内容とその成果を明らかにしていくことを目的とする。

・ケバン・ダム建設の背景

ケバン・ダム(Keban Barajı)は東アナトリア地方、エラズー (Elazığ) 県ケバン町のユーフラテス川上流に位置する多目的ダムで(人工湖面積 680 平方キロメートル、図 1 参照)、洪水調節や農業用水、水力発電などに利用されている。その発電所はトルコ最大の発電能力を有し⁶、主にイスタンブールやアンカラなどの大都市に供給されている。このように電力開発としてケバン・ダムが建設された背景には、トルコ国内の工業化に伴う電力不足がある。

トルコは 1948 年のマーシャル・プランによりアメリカからおおよそ 1 億ドルの援助を受け、それを資金として農村改革などを進めた結果、1950 年代から 60 年代にかけて工業化に成功し、急速な経済成長を果たすこととなった。しかし、工業化による慢性的な電力不足が問題となり、1963 年に施行された経済開発 5 ヶ年計画では、チグリス・ユーフラテス川流域を中心とした水資源開発がもりこまれていた。これは同時に経済発展の遅れていた東・南東アナトリア地方の地域開発の目的も担っていた。国による地域開発計画である南東アナトリア政策(Güneydoğu Anadolu Projesi, 略称 GAP)では、ダムによる水力発電開発とその電力利用による工業化、水資源による灌漑化と農業開発という二点をその目的に据えており、「東西格差」の縮小のための一方策として案じられていた⁷。GAP は 1977 年に 13 のプロジェクト(ユーフラテス川流域 7、チグリス川流域 6)を策定して本格始動しており、現在まで 22 のダムと 19 の水力発電プラントが完成もしくは計画進行中となっている⁸。

・ケバン・プロジェクト

⁶ 中島茂「電力開発と工業化」末尾至行編『トルコの水と社会』大明堂、1987 年、p.126

⁷ 同、p.123

⁸ 日本貿易振興会『エジプト、イスラエルの投資環境およびトルコにおける南東アナトリア開発計画とその現状』1998、p. 48

上記のケバン・ダム建設に際して、1966年に中東工科大学建築学部復元科により水没地域の埋蔵文化財の有無が調査され、数多くの存在が確認された。翌年にはイスタンブール大学文学部先史学科のS・カントゥマン(Sönmez Kantman)とミシガン大学人類学博物館R・ウォロン・Jr.(Robert Wallon Jr.)らが中心となって一般調査を行った。

この調査では水没地域約 680 k m²のうち財政的、時間的制約からおおよそ 200 k m²を対象とし、まず水没地域をアルトゥンオヴァ(Altınova)とアシュヴァン(Aşvan)の2地域に分けた。その上で埋蔵文化財のうちでも主として遺丘の調査に焦点が当てられ、全地域合わせて確認された60遺丘のうちアルトゥンオヴァ25、アシュヴァン7、その他7の計39遺丘が対象となった。手法としては遺丘表面を4 m×4 mの区画に区切るグリッド方式が採用され、遺丘表面にある土器片などの遺物を採取し(表面採取)その遺物の年代や特徴、統計学的な分布などが調査された。その結果、地域全体を通して青銅器時代初期、青銅器時代中期の遺物が広まっていることが確認され、いくつかの遺丘では鉄器時代やセルジューク、オスマン時代の土器片なども発見された⁹。

この調査を受けて1968年に中東工科大学を中心としたケバン・プロジェクトが設立された¹⁰。このプロジェクトには中東工科大学のほか、トルコ歴史協会(Türk Tarih Kurumu)やイスタンブール大学、外国調査隊などが参加し、事前の一般調査で考古学的遺構が確認された遺跡のうち、20遺跡の発掘調査がなされた(図2参照)。また、これとともに歴史的建造物の移転、復元や村落の家屋調査なども行われた。調査は1975年に終了し、その結果はすべて報告されている¹¹。

プロジェクトに参加した研究機関と遺跡は以下のとおり。

< アンカラ大学言語・歴史・地理学部 >

アウン(Ağın)、カライジュック(Kalaycık)、コルジュテペ(Korucutepe, 1973-75)、ハン・イブラヒムシャー(Han-İbrahimşah)、ハラバ(Haraba)

< イスタンブール大学文学部 >

デイルメンテペ(Değirmentepe)、テペジック(Tepecik)、テュリ

⁹ Robert Wallon, Jr., Sönmez Kantman, “Keban Barajı Su Birikim Alanı Yüzey Araştırması, 1967”, 1968 Yaz Çalışmaları, Ankara, 1970, pp. 1-6

¹⁰ ケバン・プロジェクトの正式名称 - Keban Bölgesi Tarihi Eserleri Kurtarma ve Değerlendirme Projesi

¹¹ 1968 Yaz Çalışmaları, Ankara, 1970, Keban Projesi 1969 Çalışmaları, Ankara, 1971, Keban Projesi 1970 Çalışmaları, 1972, Keban Projesi 1971 Çalışmaları, Ankara, 1974, Keban Projesi 1972 Çalışmaları, 1972, Keban Projesi 1973 Çalışmaları, Ankara, 1979, Keban Projesi 1974-75 Çalışmaları, Ankara, 1982

ンテペ (Tülintepe)

< トルコ文化省考古局 >

プルール (Pulur)、イエニキョイ・ホユック (Yeniköy Höyüğü)

< アンカラ・イギリス考古学研究所 >

アシュヴァン (Aşvan)、チャイボユ (Çayboyu)、キリセ・アラヌ
(Kilise Alanı)、パーニック (Pağnik)、タシュクンカレ (Taşkunkale)、
タシュクン・メヴキイ (Taşkun Mevkii)

< イスタンブル・ドイツ考古学研究所 >

キョルテペ (Körtepe)、ノルシュン・テペ (Norşun Tepe)

< シカゴ大学・カリフォルニア大学 >

コルジュテペ (1968-70)

< ミシガン大学 >

ファトマル - カレジック (Fatmalı-Kalecik)

これらの調査により取り上げられた遺物はすべて地元のエラズー博物館に収蔵された。調査終了後、遺丘はほとんど 1975 年に完成したケバン・ダムのなかに水没した。

・ 調査結果

ケバン・プロジェクトでは発掘調査において時間的制約から主にトレンチ発掘¹²による部分発掘が採用された。しかし、終始トレンチ発掘のみで調査が行われる例は少なく、ほとんどの遺丘で全面発掘へ移行して調査が進められた。また、アウン、テペジック、ノルシュン・テペ、アシュヴァン、ハラバの遺丘ではイスタンブル大学理学部実践地球物理学科の A・ヤラマンジュ (Ali Yaramancı) らによってアナトリア考古学史上初の電気探査¹³による遺構の調査が行われた。

次に調査が行われた遺丘のうちで、特に重要と思われる遺丘を紹介する。

1) テペジック

テペジックはアルトゥンオヴァ地域に位置する高さ 16-17m、面積 200×300 m² の遺丘で、1968 年から 74 年にかけてイスタンブル大学文学部史学科の U・エスイン (Ufuk Esin) らによって調査が行われた。それによると、後期新石器時代から鉄器時代までの連続した文化層が認められた。その後紀元前 1 世紀半ばから中世まで放棄されていたが、11 世紀ごろから長く墓地として使われていたことが明

¹² 遺跡に長方形の溝状の区画を設定して調査を行う方法。土層の体積状況を確認するのに適している。

¹³ 地面に電圧を加え、電気の流れに対する抵抗を測定し、地下の遺構を探索する方法。

らかとなった。

紀元前 7000 年期から 6000 年期にかけての後期新石器時代の層では、住居址は発見されなかったが、色や形状などから 2 つのグループに分類される土器が発見された。また、初期金石器併用時代の層では新石器時代から続く土器のグループとアルトゥンオヴァ地域に典型的な土器のグループが大半を占めるが、非常に少ない数ながら、現在のシリアに位置する北メソポタミアのハラフ文化やウバイド文化との類似性を持つ土器片が発見された¹⁴。さらに後期金石器併用時代、メソポタミアのウルク文化の構造を持つ建物の基礎部分が発見された。タウルス山脈の北で後期新石器時代、ハラフ、ウバイド、ウルク文化の連続性が確認されたのは初めてのことで、テペジックの遺跡がもつ重要性は高いといえる。また、初期青銅器時代の層からは幾何学文様や動物文様が発見され、中、後期青銅器時代の層ではヒッタイト文化が確認された。

2) ノルシュン・テペ

ノルシュン・テペは 1968 年の一般調査で最も重要視されていた遺丘のひとつであり、イスタンブル・ドイツ考古学研究所の H・ハウプトマン (Harald Hauptmann) によって、1969 年から 74 年にかけて発掘調査が行われた。まず、トレンチ発掘の結果、初期青銅器時代から鉄器時代にかけての層が確認され、テペジック同様初期青銅器時代の層からは幾何学文様、あるいは動物文様の彩文土器と住居址が発見されている。このほか後期金石器併用時代では彩色の施された動物壁画が確認されている¹⁵。

また、ケバン・プロジェクトでは上記の遺丘の発掘調査のほか、遺跡の移転、復元や村落調査などが行われている。特に移転の形をとった遺跡の復元作業はアナトリアでは初めての試みであり、行政発掘調査において特に大きな重要性を持っている。

移転、復元作業は中東工科大学建築学部復元学科によって 1971 年にバイスングル・ジャーミイ (Baysungur Camii) とチェレビ・アリー・ジャーミイ (Çelebi Ali Camii) というオスマン期の二つのモスクを対象にして行われた。また 70 年から 72 年にかけて、5,6 世紀のものと考えられるカラマアラ橋 (Karamağara Köprüsü) の測量、復元が行われた。

3 章 アナトリア考古学におけるケバン・プロジェクトの意義と問題点

¹⁴ Ufuk Esin, “Tepecik Kazısı, 1970”, *Keban Plojesi 1968 Çalışmaları*, Ankara, 1972, pp.139-147、Ufuk Esin, “Salvage Excavations at Tepecik”, Oktay Belli, *Istanbul University's Contribution to Turkish Archaeology 1932-2000*

¹⁵ H. Hauptmann, “Norşuntepe Kazıları, 1972”, *Keban Projesi 1972 Çalışmaları*, Ankara, 1976, p. 54

以上述べてきたように、トルコにおいて初めて行われた行政発掘調査であるケバン・プロジェクトは様々な考古学的手法や調査が試みられ、かなりの成功を収めたと考えられている。しかし、同時に多くの問題点もまた浮上し、その後の課題として残った。本章ではケバン・プロジェクトの意義と問題点を考察することによって行政発掘調査のあり方を考えてみたい。

．意義

まず、第一にこのプロジェクトによってそれまで学術発掘調査中心であったアナトリア考古学に初めて行政発掘という観念が生まれたということが挙げられる。電力開発に追随する形で始まったケバン・プロジェクトではあったが、国家的な大プロジェクトが生まれ、成果をあげたことは評価できる。また、この後のアシャウ・フラット・プロジェクトという大規模な行政発掘調査とあわせて、この二つのプロジェクトにおける原則は「文書化での遺物救済」であった。この原則は GAP 地域におけるのちのプロジェクトにも引き継がれ、産業育成を進めながらも歴史文化財の損失を最小限に留めるための指針となっている¹⁶。

次に考古学的観点からみると、このプロジェクトによってそれまで考古学的空白地帯であったユーフラテス川流域の調査が進んだことが挙げられる。前述したように、テベジュックなどの遺物から北メソポタミア地方との関連性が確認され、このことによって初めて東アナトリアがメソポタミア、北シリアとの関わりの中で捉えることができるようになったといっても過言ではない¹⁷。その結果周辺地域と関わりの中でアナトリアの文化的、歴史的 position が研究される傾向が一層強まり、このプロジェクトがその後の研究動向のひとつの方向付けをしたといえる。また、調査地域が西、中央アナトリアから東アナトリアへと大幅な広がりを見せたことも大きな成果の一つである。発掘成果をもとにして東アナトリアの文化編年が組み立てられたことで、トロイやチャタル・フユックを基盤としたアナトリアにおける文化編年の再構築を促したことは注目に値する。

さらに、多くの研究者が参加したこのプロジェクトでは、トレンチ発掘や電気探査法など、アナトリア考古学史上初の手法が試みられ、その成果のいかんは別としてトルコ、ヨーロッパの若手研究者

¹⁶ Nuhan Tuna, 'Türkiye'de Arkeolojik Kültür Mirası Yönetimi', *Cogito*, 2001, pp. 291-296

¹⁷ 護雅夫「アナトリア考古学の諸問題点」中近東文化センター編『アナトリア考古学研究』13巻、1994、p. 2

が数多く育てられたことも大きな成果の一つといえる。メフメット・オズドアン(Mehmet Özdoğan)、エンギン・オズゲン(Engin Özgen)、ハラルド・ハンプトゥマン、ウフック・エスィン、ウミット・セルダルオウル(Ümit Serdaroğlu)らはその例である¹⁸。

・問題点

このようにかなりの成果を挙げたと評価できる同プロジェクトではあるが、そこには多くの問題点もまた指摘されている。

まずは時間的、財政的制約の問題である。行政発掘という性質上、継続的な調査は難しく、それを克服する手段として上記のようなトレンチ発掘や電気探査といった手法が用いられたのだが、実際のところは目立った成果を上げなかった。また、多くの場合発掘の主眼点が出土した遺物、遺構のみに移ったことも原因のひとつで、トレンチ発掘による部分発掘のちに全面発掘に移行した例がほとんどであった¹⁹。財政的な面でいうと、67年にトルコ政府財務省は100万リラ(約4000万円)、68年にはトルコ大国民議会の予算・企画委員会は200万リラ(約4000万円)の発掘調査費を可決した。加えて同年大衆紙ミリエット(Milliyet)はケバン地方遺物救済キャンペーンを展開し約56万リラ(約550万円)の募金を集めた²⁰。しかし、それでも長期間の発掘調査には十分な額に達してはいなかったといえる。さらに、プロジェクトに参加したトルコの調査担当者がすべて大学の研究者であったことで、慢性的な専門家の不足の問題もあった。

次に、外国の研究機関に対する発掘調査依頼のありかたである。様々な国や研究機関が携わっているのがアナトリア考古学の特徴的な面ではあるが、70年代のナショナリズムの高揚により、またおそらくは60年代の「遺物持ち去り疑惑」²¹の影響により外国隊への調査依頼は激減した。それまでは主に学術調査に対する問題であったが、行政発掘の場においてもその傾向は高まりつつあるようにみられる。外国調査隊への調査依頼が上記のような財政問題や人材不足を補う一方策であり、ナショナリズムの問題の克服はトルコの考古学にとってひとつの鍵を握るものであるといえる。

¹⁸ 同、p. 1

¹⁹ 大村幸弘「アナトリア考古学における行政発掘調査」『オリエント』25・2, 1982, p.121

²⁰ 同、p. 123

²¹ 1966年、チャタル・フユックの発掘調査に携わっていたJ・メラートが出土品を国外に持ち出した嫌疑をかけられ、国外永久追放となった出来事。これによりチャタル・フユックの調査は1993年まで中断され、ほかの外国隊への発掘調査認可も厳しくなった。

さらに、遺跡の移転、復元、保存の問題もまた重要な課題のひとつである。ケバン・プロジェクトでは2つのモスクと1つの橋が移転、復元されたが、その建造物が選ばれた基準は明確に示されていなかった。歴史的建造物の修復、保存の問題は主要産業のひとつが観光であるトルコにとって重要な課題である。そのためどのような遺跡や歴史的建造物をどのような手法で移転、復元、保存するのかという価値基準の制定は急務であり、文化財保護行政の方向性を示す上でも大きな意味を持つものである。

おわりに

トルコの開発計画において、GAPの推進するダム事業は実に様々な問題を内包している。ひとつにはチグリス・ユーフラテス川の水利問題であり、下流地域であるシリアやイラクとの国際問題にも発展している。また、地域開発と銘打たれたダム建設がどの程度その地域に還元されているのかを疑問視する声も少なくない。対象地域となっている東、南東アナトリアの民族問題もまた大きな問題のひとつである。本稿ではこのように山積する問題のひとつである行政発掘をとりあげ、アナトリア考古学における行政発掘の意義と問題点、そのあり方を考察することを目的としていた。

そのためまず1章では過去から行政発掘に至るアナトリア考古学史を共和国成立以前と以後に分けて概観し、共和国成立以前から続く外国調査隊による発掘調査の沿革と、共和国成立以後トルコ人による発掘調査の開始とその発展を述べた。2章ではトルコ初の行政発掘であるケバン・プロジェクトについて、プロジェクト開始にいたる背景を工業化とそれに伴う電力開発という経済的要因から明らかにした上で、プロジェクトの参加機関、対象となった遺跡とその発掘調査の具体的内容とその成果を述べた。それをうけて3章ではケバン・プロジェクトのもたらした意義と問題点を提示した。その意義はこのプロジェクトで考古学の舞台に行政発掘という新たな観念が生まれ、考古学的に空白であった東アナトリアの発掘調査が進展したことであり、このプロジェクトを通して多くの若手研究者が育てられたという点である。問題点としては、時間的、財政的制約と、トルコにおける発掘専門家の不足が挙げられる。それを補うという点でも外国調査隊への発掘依頼がひとつの選択肢ではあるのだが、ナショナリズムの台頭を前にしてそのハードルは高い。また、遺跡の移転、復元、保存における基準が曖昧であることを指摘し、その基準の制定が観光産業との関わりからも重要であることを述べた。

しかし、本稿ではケバン・プロジェクト以降の行政発掘調査をフ

ォローし、その変化を捉えることはできなかった。また、他国の事例を取り上げ、比較研究することも今後の課題として残った。トルコ文化省による文化財保護行政についても詳しく見ていく必要がある。

今後トルコにおける行政発掘調査が開発追従の立場から脱却し、アナトリア考古学においてその重要性を確立していくためにもあいまいとなっている手法や価値基準の確立が必要である。そのうえで十分な調査が進められるためには、行政、トルコ国内の研究機関、外国調査機関の三者の連携がより深められることが求められる。

文献目録

ケバン・プロジェクト調査報告書

- 1970 *1968 Yaz Çalışmaları*, Ankara,
1971 *Keban Projesi 1969 Çalışmaları*, Ankara
1972 *Keban Projesi 1970 Çalışmaları*, Ankara
1974 *Keban Projesi 1971 Çalışmaları*, Ankara
1976 *Keban Projesi 1972 Çalışmaları*, Ankara
1979 *Keban Projesi 1973 Çalışmaları*, Ankara
1982 *Keban Projesi 1974-75 Çalışmaları*, Ankara

外国語文献

Esin, Ufuk

- 2001 “Salvage Excavations at Tepecik”, Belli, Oktay(ed.), *Istanbul University's Contribution to Turkish Archaeology 1932-2000*, Istanbul
İğdemir, Uluğ

- 1973 *Cumhuriyetin 50. yılında Türk Tarih Kurumu*, Ankara

Meskel, Lynn(ed.)

- 1998 *Archaeology Under Fire: Nationalism, politics and heritage in the Eastern Mediterranean and Middle East*, London

Nuhan Tuna

- 2001 “Türkiye’de Arkeolojik Kültür Mirası Yönetimi”, *Cogito*, Ankara

百科事典

- 1994 *Ana Britannica*, cilt. 3, “Arkeoloji”
1994 *Ana Britannica*, cilt. 18, “Keban Projesi”

日本語文献

大村幸弘

- 1982 「アナトリア考古学における行政発掘」、『オリエント』25-2、

大村幸弘

- 1978 「アナトリア考古学の現状」、『オリエント』21-2

大村幸弘、護雅夫

- 1989 「アナトリアにおける発掘調査の沿革概要」、『東方学』78

中島茂

- 1987 「電力開発と工業化」、末尾至行編『トルコの水と社会』、大明堂

日本貿易振興会

- 1998 『エジプト、イスラエルの投資環境およびトルコにおける南東アナトリ

ア開発計画とその現状』

護雅夫

1994 「アナトリア考古学の諸問題点」、中近東文化センター編『アナトリア考古学研究』13巻